

◇項目(1)(2)の詳細解説

(1) 名和昆虫博物館の創設者の名和靖氏の紹介と創設の経緯 (現館長の名和哲夫会員は5代目です)、意義、その後の歴史

名和靖は、1857年(安政4年)10月8日、岐阜県本巢郡船木村重里(現在の岐阜県瑞穂市重里)に生まれる。祖父桂樹は庄屋だったため、幼い頃より農家の人々の苦労話を耳にする環境で育った。特に靖の大好きな昆虫による被害には心を痛み、次第に昆虫研究を通じて農家のためになる仕事をしたいと考えるようになる。1878年(明治11年)11月、岐阜県農事講習所(まもなく岐阜県立農学校となる。現在の岐阜県立農林高等学校の前身)に入学し、その後の生き方の基礎となる経験を積む。1882年(明治15年)卒業とともに、岐阜県立農学校の博物学助手となり、昼間は学校で教鞭をとり、夜は農家の集まりなどに出かけ、農作物の害虫駆除、益虫保護などの教えを説いて回る日々を送る。1896年(明治29年)2足のわらじは履けぬという思いで教職を辞し、私立名和昆虫研究所を設立し、農作物の害虫だけではなく、昆虫学全般においても先駆的な役割をになうことになる。特に翌年(1897年)の全国的なウンカの大発生は、まだ農事試験場などが充実していない当時の日本にあって、名和靖ならびに名和昆虫研究所の名を全国的なものにした。

名和靖は郷土の偉人として親しまれているが、その主な理由は、「農事試験場のような施設を個人の力で設立し、農業に被害をもたらす害虫研究において先駆的な役割を果たした」ということで言い表せると思う。

財政基盤が個人中心だったということは、すなわち不安定な財政状況であることを意味し、靖は常に運営のための資金繰りに追われることになるが、1911年(明治44年)組織を財団法人に変更し、国の補助も受けられるようになり、研究活動に専念することができるようになる。名和昆虫博物館は、1919年(大正8年)、昆虫、特に農作物、シロアリなど害虫に関する啓蒙普及のために建てられた附属施設である。

靖以後、2代目梅吉までは先代の意思を継ぎ、昆虫学ならびに害虫駆除を目的とした応用昆虫学の分野で活躍していたが、1945年(昭和20年)に梅吉が亡くなり3代目正男の時代になると、補助金などがすべて停止させられたため、研究活動ができなくなった。一時、存亡の危機とまで危惧されたが、当時教諭職にあった長男正男が職を辞して名和昆虫研究所所長、名和昆虫博物館館長を引き継ぎ、主な活動を一般昆虫のための啓蒙普及へとシフトし、名和昆虫博物館が主な活動の場になっていった。以後、4代目秀雄、5代目哲夫に至る現在まで、その方向性で活動し続けている。

(2) 板倉聖宣前学会会長との出会い、その後の関係、今回の講演との関係 (名和哲夫会員は仮説実験授業研究会の会員で、出会いは中学時代)

僕は、中学1年のときに担任だった犬塚清和氏が行ってくれた「仮説実験授業」を受け、アルキメデスの浮力の原理を自分でも発見できたかのような体験と感動を味わうことができた。それ以来、科学者という存在に大きな憧れを持ち、将来は科学者になりたいと考えるようになった。大学時代に職業的科学者になることは断念したものの、今現在もある意味アマチュア科学者としての楽しみを持っているのは、このときの経験が決定的だったことは間違いない。犬塚清和氏は、板倉聖宣氏の提唱した仮説実験授業の熱心な実践者で、板倉氏の思想、考え方を僕は犬塚氏を通じて学んだことになる。実際、仮説実験授業を経験した僕は、教育の世界で仮説実験授業を取り入れることが当然で、中学生だった当時、「きっとこの授業形態が将来の教育界の主流になるだろう」と思っていた。残念ながら、今現在、そのような状況にはなっていないが、今でもそうなることを願っている。なぜなら、この授業では、最先端の科学者、学者が未知のものごとを解き明かす過程の楽しさと自分の予想を確認できたときの感動(予想通りの場合)、更なる疑問(予想が外れた場合)などを教室で味わうことができる可能性があるからである。もちろんこの授業を受けた生徒、学生すべての人が僕と同じ感動を味わえるということではない。ただ、少なくともその分野の学問が自分にとって興味深いものかそうでないものかの判断の大きな手助けをする授業形態だと僕は思っている。少なくとも現行の形態よりは。

岐阜大学の修士課程1年目のとき、板倉聖宣氏から、「岐阜にある名和昆虫博物館のお金の流れを調べてほしい」と依頼された。後で知ったことだが、板倉氏は、在野の科学者に大きな興味を持たれていて、その中の一人に岐阜の名和靖がいた。「お金の流れを調べれば、その組織の性質がわかる」ともおっしゃっていて、当時の僕ではその意味をあまりよく理解できなかったが、今現在は、大変よくわかる。僕にとって、「名和昆虫研究所設立当初から、岐阜県、岐阜市から補助金をかなりの比重で受けていたのに、私企業のようなユニークで独創的な活動をし続けることができた理由は何か？」ということが今現在抱いている最大の疑問となっている。財団法人組織となった1911年(明治44年)以降、国からも国庫補助を受けていて、その額は、総予算の6割に及んだ。それなのに、名和昆虫研究所の活動は常に靖の思想を反映した活動を続け、県や市がそれを追従するような形で運営がなされたのはいかなる理由かということである。この疑問は、お金の流れを調べるにつれて大きくなってきた。

板倉氏の調査依頼がきっかけで名和昆虫博物館に出入りするようになり、靖という人物の魅力に触れたことが今現在の自分につながったということを考えると、僕の人生にとって板倉氏の存在は、なくてはならないものであった。直接お会いして影響を受け続けたという形ではなく、科学史研究の結果生み出された全く新しい授業形態を受けたことによる間接的な影響の受け方ではあるが、それがもしかしたらより自分の考えを大切にしつつ影響を受けることができたのかもしれない。